



被災地医療の現状

滝川市医師会
滝川市立病院
野口 淳史

このたび、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市において、医療支援を行って参りましたので、ご報告いたします。

陸前高田市の医療の中核を担ってきた県立高田病院は、最上階の4階まで津波の大打撃を受け、病院としての機能は完全に停止しました。医療スタッフの中にも家族や自宅を失った方がいましたが、それでも後ろを振り返る余裕すらなく、間もなく避難所等で最低限の診療を再開しました。

6月現在、全国各地から医療支援チームが来ており、米崎地区のコミュニティーセンターを中心に最低限の医療機器を揃え、各診療科の医師を集めて診療を行っています。道内の自治体病院からも、道の要請により週替わりで派遣され、当院も私のほか看護師2名、薬剤師1名、事務職員1名、計5名のチームを組んで6月13日（月）～17日（金）の5日間、現地で診療を行いました。

われわれが担当したのは気仙町の長部（おさべ）診療所と呼ばれる仮設診療所で、1日約20人程度の慢性疾患を中心とした患者さんの診療を行いました。診療所内には常備薬が少ないため、コミュニティーセンターから調達し、翌日に手渡すという流れです。中には感冒や胃腸炎で受診される方もいるため、抗生物質や整腸剤は切らさないよう注意を払いました。

われわれは一関市内のビジネスホテルを拠点とし、毎日1時間15分ほどの距離を往復しました。毎朝、米崎コミュニティーセンターでミーティングを行い、県立高田病院の石木幹人院長の指揮のもと、前日の診療状況を報告して情報の共有に努めました。震災前は気仙大橋というバイパスルートがあったため、長部から米崎地区までは10分程度の距離でしたが、橋が津波で流されてしまったために現在は30分以上もかかってしまいます。あくまで仮設ですので、診療所は6月末をめどに閉鎖する予定でしたが、米崎までの移動手段がなく、長部での診療を続けてほしいという市民の声が数多く聞かれました。

そんな中、石木院長は、全国各地からの医療支援チームや、現地の住民との対話を密に行い、一日も早く、県外の医療支援に頼らずに自立したいという強い気持ちを持って、現場で指揮を執っておられま



した。ご自身も被災され、計り知れないほどの苦境に立たされているにもかかわらず、復興のために尽力されている姿に心を打たれました。

今回の災害派遣で目の当たりにしたのは、映像では表現しきれない過酷な現場のみならず、支援の輪から生まれた心の絆です。現地はまだまだ瓦礫の山で埋め尽くされており、復興への道のりはまだまだゴールが見えない状況ですが、このような心の絆を絶やさなければ、着実に一歩ずつ前進するものと確信しております。いつか、復興後の医療のみならず、高田松原の松林をはじめとする美しい景観を取り戻した姿をぜひこの目で確認するために現地に再び訪れる日が来ることを祈念します。また、このような災害支援に、微力ながらも携わることができ、大変光栄に感じております。この経験を糧に、適切な医療を受けられること、提供できることを「当然」ではなく「奇跡」と感じながら、日常診療を続けて参りたいと存じます。

